人はどのように はたらいてきたか?

神戸女学院大学 石川康宏

みなさん、こんにちは。神戸女学院大学の石川康宏です。本誌編集部から「労働の歴史」について、書くようにとのご依頼です。じっくりやっていきたいところですが、〆切は明後日と、すでに切羽詰まっています。

なぜ、もっと早く書き出さなかったのか。それは、昨日が参議院選挙の投開票日で、それに向けてなにかとこの間は忙しく、その前には『若者よ、マルクスを読もう(番外編)』の〆切があったからです。もう少しのんびりやれるといいのですが、この忙しさも現代における「労働」の特徴の一つといえるでしょうか。

では、急いで書いていきましょう。一つ目に、人が「はたらく」ということの意味、二つ目に、人は「どうはたらいてきたか」、三つ目に「はたらく環境を良くするには」と、そんな順番でやってみます。うまくまとまってくれるといいのですが。

1 人が「はたらく」ということは

「はたらく」という言葉をネットで調べてみると、ｇｏｏ辞書には「仕事をする。労働する。特に、職業として、あるいは生計を維持するために、一定の職に就く」とありました。「生計を維持するために」のあたりは、「お金をかせぐために」とも読めそうです。

次に、Ｇｏｏｇｌｅ辞書も見てみました。すると、こちらは「目的にかなう結果を生ずる行為・作用をする。仕事をする」となっています。

このふたつ、組み合わせるとなかなかいい線をいっているようです。Ｇｏｏｇｌｅは、人がいつの時代にも共通して「はたらく」ことの中身に力点をおき、ｇｏｏは、その今日的なあり方に注目しています。

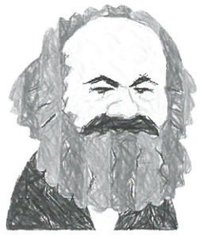
ここで、「はたらくこと=労働」についての、学問世界の大物の言葉を紹介してみます。

「労働は、まず第一に、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である」。

急に難しくなりましたね。さすがは大物です。この言葉、だれのものかわかりますか。19世紀にヨーロッパで活躍したカール・マルクスが、『資本論』という分厚い本に書いたものなのです。

意味はだいたいこんな感じです。人ははたらくことで、自然との「物質代謝」を行っている。物質代謝というのは、自然から必要なものを得て、いらなくなったものを自然に返すということ。たとえば、人は、自然から食べ物を得て、自然に排泄物を返す。自然から鉄鉱石を採り、鉄をつくって、いらなくなったら捨てるといったこともやっている。それらを人は、「労働=はたらくこと」を通して行っている。

でも、食べて出すというだけなら、動物だってやってることですよね。考えてみれば「物質代謝」は植物だってやっています。植物は、二酸化炭素を吸って、酸素を吐いていますから。



しかし、そこはさすがに大物。そんな疑問は想定内だと、話をグイグイ前に進めます。すべてにつきあっていると、とても字数が足りませんから、ここはぎゅっとまとめていきましょう。

一つ目に、人は労働を「道具」を使って行っている。そこが動物との決定的な違いなのだ。日本列島のご先祖も、弓矢ややりで獲物をつかまえた。クマだと自前のツメや牙が武器になる。しかし、人はそこに「道具」というものを、しかも改良しながら入れ込んでいく。

二つ目に、人は労働する時に、結果をあたまに浮かべている。捕まえたシカの調理でも、木を切って家を建てる時でも、出来上がりをあたまに描き、それに近づくようにつくっていく。ハチやアリも見事な巣をつくるが、同じアリが、今月はシロアリの巣を、来月はクロアリの巣を、再来月はちょっと遊んでミツバチの巣を、なんてことはこの世にはない。完成品を自由に描くのは人間だけ。Ｇｏｏｇｌｅが「目的にかなう結果を生ずる行為・作用」と書いていたのはこのことだ。

三つ目に、労働は人間の進化の原動力にもなってきた。もっといい道具を、もっといい生活用具を、そうした追求が人の手先を発達させ、それ以上に頭脳を発達させた。つまり「人間は、(手や頭)この運動によって、自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させる」。

なるほど、さすがは大物ですね。ここで確認のために、人類進化に関する手元の本を開いてみると、直立二

足歩行するご先祖の登場は、およそ700万年前のことだと書いてあります。そして石器（道具！）をつくるようになり、脳の大型化がはじまったのが250万年前。そのあたりから、人は「労働」をつうじた「物質代謝」を行うようになったということです。

2 社会の歴史にそって見てみると

ここまでは、労働を人と自然の関係で見てきました。ここからは、人と人の関係で考えてみます。人間社会の中にとらえてみるということです。おおよその歴史の順にそって見てみましょう。

〔原始の共産制社会〕

まずは、労働によって他の動物と区別されるようになった人間が、最初にそこでくらした社会です。人は小さな集団の中で、力をあわせて労働し、集団の「生計を維持」していました。人類史でもっとも長いこの社会は、みんなで力をあわせる「共同」を何よりの特徴としたのでした。日本だと、人類がここ（後には列島）にやってきてから、縄文時代の終わり頃までの社会です。

〔古代の奴隷制社会〕

ところが、直後に大転換が起こりました。社会の中に、他人の労働の成果を力で奪う「支配者」が登場したのです。社会は、多数の奴隷と、それを支配する武力をもった少数の奴隷所有者に分裂しました。大事件です。日本だと、弥生時代から平安時代くらいまでがこの社会に当たります。京都の貴族の優雅なくらしは、たくさんの奴隷労働に支えられたものでした。

〔中世の封建制社会〕

次も、分裂と対立の社会です。今度は、強い武力をもった者が土地を自分のものにし、そこに農民などをしばりつけ、労働の成果のかなりの部分を「年貢」として奪い取るというものです。日本では鎌倉時代から徳川時代くらいまでの社会がこれで、「年貢」を差し出さなければ、お代官様にバッサーと切られることもありました。

〔近代の資本主義社会〕

ここまできて、社会の分裂はようやく少しだけ是正されます。人民のたたかいが、人々の法的な「平等」を勝ち取ったのです。しかし、経済的な「不平等」はつづきます。労働には工場や建物などが必要ですが、それを持つ資本家が労働者をはたらかせ、労働の成果のかなりの部分を「合法的」に――契約にもとづいて――もっていく。それがこの社会の特徴です。日本では明治時代から

発展してきた社会です。

いやあ、なんだかつらくなっちゃいましたね。せっかく、労働をつうじて進化させた高い能力なのに、それを、人がいがみあう社会で発揮せねばならないとは。

3 どうすれば共同を回復できるか

どうして、こんなことになってしまったのか。そして、ここから抜け出すことはできるのか。最後に、この問題を考えてみます。

共同の社会から分裂と対立の社会へ。この大転換は、原始共産制社会から奴隷制社会への移行の中で起こりました。

その理由の一つは、道具と人間の発展が社会の生産力を高めていき、みんながはたらかなければ生きられないという、それまでの事情を変える可能性が生み出されたことでした。おれたちがはたらかなくても、あいつらをはたらかせるだけで、みんな生きていけるじゃないか。そういうやり方が可能になったのです。

そして、それを、二つ目の理由が現実のものにしていきます。当時の人と社会には人権の思想がまるでなく、他人を支配することに、まったくブレーキがかからなかったのです。そこから自分の豊かさを目的に、他人の労働を力で支配し、その成果を奪い取ることが始まりました。人はまだまだ未熟だったのですね。

そうしてつくられた分裂の社会は、封建制から資本主義へと姿をかえてつづきました。それは、もう誰にも変えられない「仕方のないこと」に見えてきます。しかし、歴史というのは面白いもので、いまの社会は、共同の社会を再建する、新しい条件を生み出しています。

その一つは、工場や企業が大きくなり、労働が多くの人の共同でしか行えないものに変わってきたということです。仕事といえば、職場に集まって、みんなで力をあわせてするのが当たり前。家族ごとにばらばらだった労働が、このように変えられたのは、資本主義の中でのことでした。

二つ目は、人はみな自由であり、誰もが生存権、教育権、労働権をもっており、それを国家が保障するのが当たり前。そういう人権の思想が、多くの国で否定することのできない社会になったということです。これもまた、資本主義の社会が生み出した変化でした。

ここから先に進むには、どのような一歩が必要でしょうか。再び、大物マルクスに登場してもらいます。権利の平等は大事だが、それだけでは、本当の平等は実現しない。もっと大切なのは生活の実態の平等だ。それをじゃましているのは、工場や部品、組織などを、少数の資本家の持ち物にしている社会のしくみで、それらを社会全体の持ち物に転換することが必要だ。そのためにはまず、はたらくものの政治をつくる必要がある。

そんなふうに語ったマルクスは、資本主義を超える新しい社会のことを、「共同的生産手段で労働し、自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体」と特徴づけました。

さあて時間切れの上に、字数ももはや限界です。いかがでしょう。人間労働の過去・現在・未来を、大きな視野で描いてみました。お仲間との話のネタに、お使いいただければ幸いです。

（いしかわ　やすひろ）